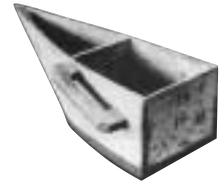


財団だより

第127号

2010.9

多摩川



波切り構造の舟形箱眼鏡 / 立川市教育委員会蔵



Photo & Text
遠藤 顕彦 (Hidehiko Endo)
渋谷区在住

数馬峡

青梅線を白丸で降り、数馬峡橋を渡って対岸を歩くと川の両岸にはびっしりと木々を蓄えた山々の深い緑が迫り、中空高く架かる吊り橋、上流の方に連なる山々と多摩の流れは、いつぶくの山水画を想わせる様。

春から秋にかけての木々の深い緑、特に秋の紅葉とその山影を映すゆったりとした水の流れ、満々と水を貯えた白丸湖等、何をとっても心にせまる美しさでした。

Contents 目次

- 巻頭言
100年以上歌い継ぐ「多摩川の歌」を…………… 2、3
- 特別寄稿
「半径300メートルに責任を」=「淵の森の会」の活動 …… 4
- 「釣りは自然科学への第一歩」多摩川は優秀な実習場です …… 5
- 「多摩川天然あゆ」復活 ……………… 6
- 清瀬の植物(清瀬の植物調査報告)を刊行して ……………… 7
- 歴史・多摩川 ……………… 8
- インフォメ多摩川 ……………… 9、10
- 財団からのお知らせ
助成研究募集のご案内 ……………… 11

巻頭言

100年以上歌い継ぐ「多摩川の歌」を



人事院人事官
美しい多摩川フォーラム
名誉会長

篠塚 英子

私は現在の公職に就く以前から知人に頼まれ、任意団体である「美しい多摩川フォーラム」に発足時から関わり、ボランティア活動を続けてきた。公務上、会長職こそ退いたが、今なおこの仲間たちとの活動を大切にしている。

実はこの運動にはすでにモデルがある。山形の最上川を中核とした「美しい山形・最上川フォーラム」の成功例である。種を明かせば山形で運動を仕掛けたM氏が多摩川流域に職場と住居を移したのを契機に、新しい運動をこの地域に起こした次第。そこで現在では、最上川と多摩川の2つの運動はゆるい連携関係にある。

この運動の主たる活動は多摩川の源流から大田区の河口まで138キロの流域一帯を、夢の桜街道に変え、桜の銘木で札所八十八カ所を造る。川や森林は子どもたちのカヌー遊びや炭焼き体験等を通じて自然環境を学び場にしたい。大人たちも一緒に文化活動を楽しむと同時に地域コミュニティを作り、地域を活性化させる産業も起こすだろう、と夢はどんどん膨らむばかり。

会員の年会費は一口(1,000円)以上と少額で、会員数もやっと900人弱であったから会費だけではその額はわずかであり、事業費としてはとても十分とはいえない。しかし産官学の連携・協働事業という趣旨に賛同が集まり、自治体や企業からの支援のおかげで、事業は予想以上の展開を見せ

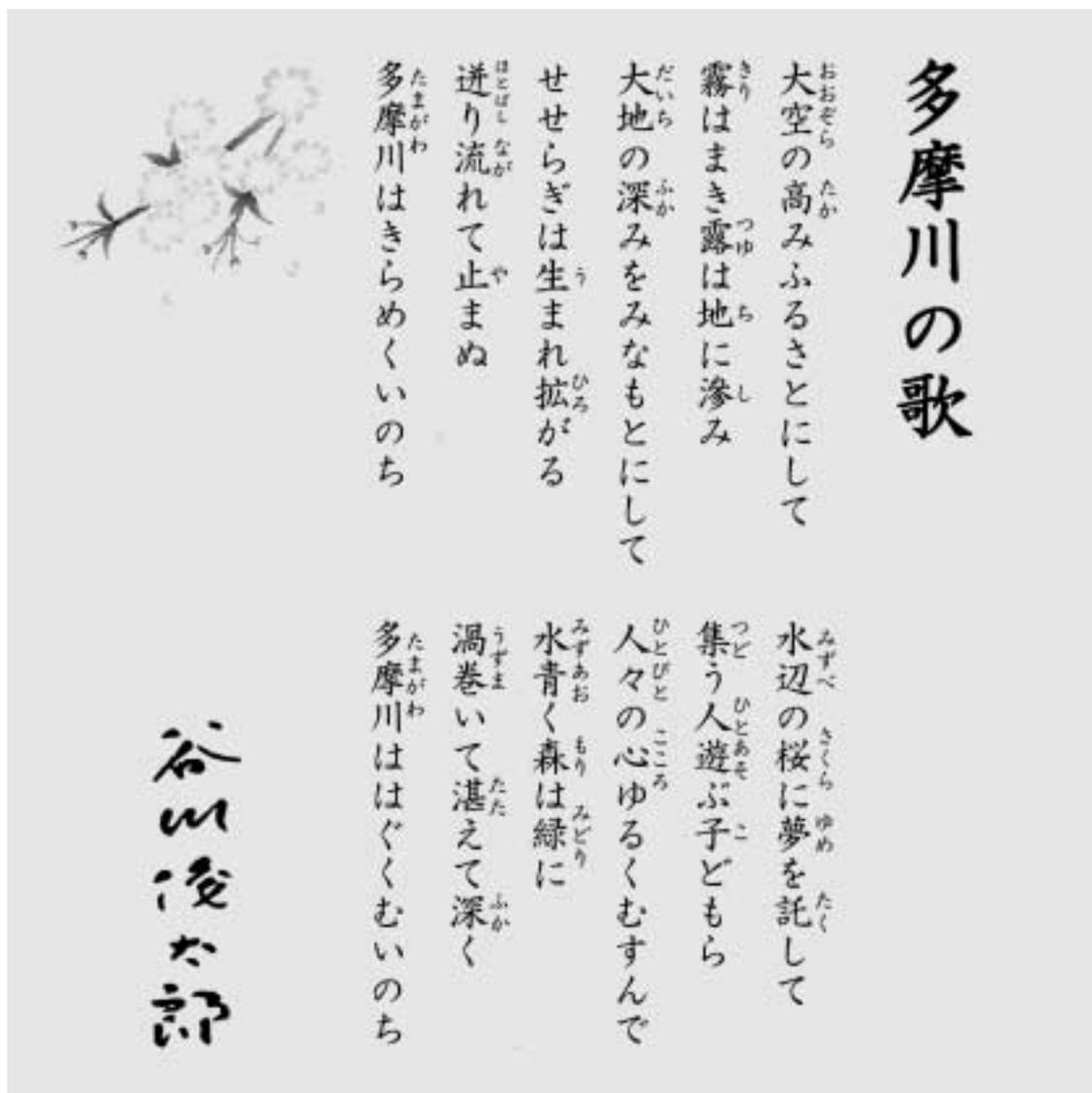
ている。この春も私は大田区洗足池公園内に、札所を命名した枝垂れ桜1本の贈呈式に参列したところである。

わずかな事業資金で数倍の大事業が実施できるのは、各方面での優れた人材がボランティアとして得意分野で貴重な時間を提供してくださる御蔭である。どんな事業でも人件費に7、8割かかるのが普通だが、こちらはどんなに著名人であろうと報酬はゼロだからその数倍の事業展開ができるのである。

今年はフォーラム設立実働3年目にしてビッグイベントがあった。本年5月「多摩川の歌」が完成し、お披露目を果たしたことである。フォーラム発足時から運動のシンボルとして、命をはぐくむ子どもたちに100年は歌い継がれる歌を作りたい、と強い目的をもち運営委員のメンバーを組んだ。多摩川流域の住人でもある声楽家の保多由子氏をヘッドに、彼女の強いネットワークで豪華キャストが決まった。作詞家には言葉の魔術師、谷川俊太郎氏、作曲は新進気鋭のピアニストでもある寺嶋陸也氏、彼は素晴らしい合唱曲も作ってくれた。

谷川氏の格調高い歌詞の中で特に2番にあるフレーズ「人々の心ゆるくむすんで」から「多摩川ははぐくむいのち」の一連の流れは素晴らしい。目的さえ明確であれば、人びとはそのために他人とゆるくむすび、また別れる。人びとの命はいずれこの世から消えるが、川は人びとの命と想いはぐくみつつ、延々と何百年、何千年と、流れ続けるだろう。

「多摩川の歌」、100年以上歌い継いで欲しいと、いま、切に願う。



谷川俊太郎 (作詞)

1931年東京都杉並区生まれ。1952年第一詩集『二十億年の孤独』で詩壇に登場、以来詩作を中心に、翻訳家、絵本作家、脚本家として、またエッセーや評論などでも活発な活動を続けている。他分野の芸術家と交流し、また影響を与え、常に自由な発想から創作を続けて独自の世界を築いてきた。「詠み人知らず」となることが理想」と語るとおり、その作品は幅広い年代の多くの人々に親しまれている。英語はじめ多くの他言語にも訳され、現代日本を代表する詩人として、世界中にも多くの読者を得ている。

寺嶋陸也 (作曲)

1964年神奈川県相模原市生まれ。東京藝術大学、および大学院で作曲を学ぶ。在学中から作曲とピアノ演奏の両面で活発に活動し、オペラシアター「こんにやく座」を始めとする劇場での演奏は高く評価される。作品は幅広いジャンルにわたり国内外で演奏されているが、特に合唱作品は全国の学校、大学や合唱団で盛んに演奏され、作品委嘱は絶えることなく、次々と新作が生まれている。作曲はもとより、ピアノ演奏、指揮、音楽監督、コンサート企画などでもその才能を発揮し、活動の幅を広げている。

特別寄稿

「半径300メートルに責任を」 ＝「淵の森の会」の活動



『淵の森の会』
事務局長 安田 敏男

1996年春、バブル倒産でこの森を「宅地開発」する情報を入手した事務局長の私は、早速、2つの自然保護団体（柳瀬川をきれいにする会、生態系保護協会）と5つの自治会に働きかけて組織を作り、会長に宮崎駿さんをお願いして、東村山市、所沢市に「公有地化」を求めて活動を始めました。しかし、両市とも「財政が厳しいので・・・」と逃げ、埼玉県と東京都境の森のこともあってか、まったく冷たかったのが実情です。

そこで、募金を開始して市に寄付する指定寄付作戦をはじめたところ、宮崎駿会長が「なんとしてもこの森を残したいので・・・」と、3億円の寄付を申し出たから会員はびっくり仰天で、マスコミも大騒ぎになったのです。ちなみに市民寄付はマスコミの影響もあったおかげで一気に100万円ほどになりました。

公有地化が成功すると、いま流行の「協働」を先取りしたように、管理は「淵の森の会」が引き受けました。駐車場だったところを企業ボランティアでコンクリートや砂利を撤去したが、産業廃棄物にせず森に埋めて2つの山を作った。遠く九州や市民から寄せられた苗木500本も植樹し、真夏の水遣りを交代で実施して1本も枯らすことなく育てたのは主婦&子供パワーで、素晴らしかったです。

2007年には、淵の森の横を流れる柳瀬川の対岸が宅地化されそうになり、新たに、宮崎駿会長のコピーサイン入り領収証をハガキで郵送する、1口1000円の募金活動を展開したところ大反響で、全国から2500万円以上が集まり、見事に公有地化できました。なかには、子ども同士で500円づつ1000円を送金してくれ、もちろん2人に領収書を送ったところ、たいへん喜ばれました。

『淵の森の会』は、組織をシンプルに、会議は森の中で、情報は壁新聞で共有、森が主役、を基本にして、年1回の『早春の下草刈り（1月下旬）』

だけの活動です。年1回の活動の基本には、『森の中を静かにしてあげる＝森が主役』だからであります。『淵の森』には、貴重な植物（植物名は内緒）やさまざまな昆虫、ハグロトンボ、オオタカが飛来しタヌキが棲み、横を流れる柳瀬川には、ウグイ、



前列左端が宮崎駿監督で、右端が安田敏男事務局長（2/3）

ヨシノボリ、ハヤ、カワエビ、そして「アユ」や貴重すぎる「川シジミ貝」もいますので、「そっとしてあげたい」のです。また、『淵の森の掟（やくそく）』という看板が有名で、「みどりを守り育てよう」「ゴミは持ち帰ろう」「事故は自分の責任です」と3条があります。

いま、日本中で無駄な開発を止めさせ、「みどりを守ろう」という市民運動が活発になっていますが、宮崎駿会長は「半径300メートルの自然保護にそれぞれが責任を」「もう、人間が減っていくのだから・・・」「コンクリート税も考えようよ」と呼びかけています。

淵の森が一番好きな人は宮崎駿会長であり、森の中を散歩しながら新しい映画の構想を練っているようです。



『本当にたくさんの人に助けをもらい、あの風景を残せることになりうれしい。これから、生きた森や川との付き合いが始まるが、身が引き締まる思いがしている。』

淵の森保全連絡協議会長 宮崎 駿

<http://www.fuchinomori.com/>

連絡先：〒359-0025 埼玉県所沢市上安松 476-1

Tel&Fax：04-2944-2633（安田敏男事務局長宅）

多摩川に学ぶ

「釣りは自然科学への第一歩」多摩川は優秀な実習場です

多摩川釣り観察「さかなが教えてくれること」発行に寄せて



美しい多摩川フォーラム
アドバイザー
東京海洋大学客員教授

奥山 文弥

里山、生態系、エコロジー。近年はこうした言葉の流通に伴い、市民の自然への意識が高まりを見せているように思われています。「温暖化問題」など、情報化社会のなかで地球規模・人類規模で問題が共有・議論されるものも出てきました。新聞、TV等のマスコミ情報では、これらの文字や言葉が載らない日はないといっていいほどです。

この流行ともいえる一連の事象は、エコポイントに象徴されるように政治・経済にも大きく結びつき、個々においても「エコな私」などといったクリーンなライフスタイルの演出の一助となっているようです。

しかし、現実には私たちひとりひとりの暮らしの足元を見つめたとき、それらは、ある面ではいかにイメージ先行のものであるかがふとわかって愕然とします。

多摩川はそのエコを私たちに実体験させてくれる最適なものです。

私はかねてより「川（水辺）の環境を観察するには釣りが一番」と考えていました。その視点から、釣りを通して多摩川の魚や自然に触れあい、環境教育の啓発に努めるために本書を発行しました。

大都市・東京を流れる多摩川という身近で、かつ大きな自然を舞台に、そこにはどんな魚たちが今すんでいるのか・川と人とのつながり・子供たちを対象とし



親子で遡上マルタ釣りを楽しむ筆者（多摩川登戸にて）

た水辺の環境教育・それらを実践&観察するための方法としての魚の釣り方をわかりやすく紹介した環境生態学への初歩的な手引書でもあります。

また、とうきゅう環境浄化財団からの助成を得て、多摩川流域の美化活動の啓蒙普及に努める美しい多摩川フォーラムと連携し、アユなどの多摩川のシンボリックな魚たちの観察会のようすも紹介しています。なぜ多摩川なのか、それは月刊『つり人』誌上の好評エッセイ「多摩川釣り散歩」をベースにして、同ボリューム以上の書き下ろしを加えた本書のレポートを読んでいただければわかります。

魚を釣りたいために研究する、努力する、川の生態を知る、魚の習性を調べる、雨量と水量の関係を実感する、つまり状況判断をする中で、「増水したから釣れない。減水したから釣れない。それはなぜ?」「なぜこの魚がここにいる?」「もしかしたらこの魚は絶滅危惧種?」など事実に対する疑問をどんどん持ってください。それを解決すること、調べることは自然科学への第一歩です。釣りがきっかけで水辺の環境生態学に興味を持ってもいいじゃないですか? 将来、多摩川がきっかけで人類の危機を救うような画期的な発明をする子供たちを育てる可能性もあるんです。

そこまで大げさでなくても、日本人が忘れかけ始めている、水辺に対する総合的な理解力を身につけるといふことにもつながるのです。

身近に釣りを教えてくれる人がいればいいのですが、そうでない場合でも以前は、川の近くに釣り好きのオーナーが経営する小さな釣り具店がたくさんありました。しかしそんな店も減り、身近な情報源も少なくなった今、本書はきっと役立ってくれると思います。釣り教室や、観察会などのイベントに参加して「その気」になっただけではなく、今度は自分自身やご家族であるいは仲間を誘って多摩川で釣りをして、都会の大自然を体感してください。



奥山文弥 H P

<http://www.f-okuyama.com>

多摩川散歩

「多摩川天然あゆ」復活



蕎麦酒房「^{しょう}笙」
女将 阿佐美 笙子

多摩川の風物といえば花火、ボート、釣り、川辺のバーベキュー等多くの人に親しまれています。登戸付近でカメラに収めようとファインダーを覗いてみると、すさまじい勢いのあゆが数知れず飛び跳ねています。それを鵜が近づき水しぶきを上げた壮絶バトル。それが可笑しく、ついカメラを回すのを忘れてその光景を見続けている男性がいたりします。今の多摩川の様子です。

1970年代には家庭排水の汚染により汚れていましたが、下水処理が整備されきれいな川となっています。あゆ等の魚が多く見られるようになり、子供から大人にまで大人気の川、復活です。「多摩川をきれいに」とボランティアの方々やそんな川崎市民の願いをサポートする行政の方の努力の賜物と言えます。

小田急生田駅の近くで蕎麦酒房「^{しょう}笙」を始めたのは2003年のこと。地域の中で地域の食文化の発祥地を目標に、手打ちそばとおいしいお酒の小さな店を始めました。地域の食文化の中心と言えば多摩川の魚。ある時多摩川であゆ漁をされている漁師の山崎さんとお会いする機会がありました。そこで聞きしたのは、あゆは鮮魚店などに卸されているのではなく、多摩区民祭や川崎市民まつりなどの地域のイベントの時、定番の塩焼きの屋台が登場する時にのみ供されるとのこと。それで素人の私はあゆは鮮魚店で販売するほど漁獲できないのですかと質問したところ、そうではなく食文化の変化で、自宅であゆを食べる家庭が無くなったのが理由だそうです。そこで私の店であゆ料理を出せないだろうかと考えてみました。そばと相性がいいのはなんといっても天ぷら。そこで早速あゆを天ぷらにしたところ、頭から尾まで食べられ「旨い」と確信しました。

お客様の評判は上々。東京下町育ちの30代の男性。その方は池波正太郎の「鬼平犯科帳」のファンで、そ

の中に多摩川のおゆが登場するそうです。そして毎日新聞に紹介された記事で、多摩川のおゆを食べられると当店のことを知り、わざわざ足を運んで下さったそうです。本の中で先生は、食通の鬼平に「多摩川のおゆは旨い」と喋らせているそうです。そのお客様はあゆだけでなくうちのそばも絶賛してくださり、今では当店の常連様となっております。

またある時、60代の上品なご夫人が来店されました。「子供の時、二子多摩川付近で泳いでいました。近くの漁師さんが釣った魚を父に届けてくれて夕飯に食べていた記憶が蘇ってきます。父が生きていたら喜んでいたことでしょう」と嬉しいお褒めの言葉を頂きました。

子供の頃に食べた味が忘れられない。

それを今の子供たちに伝えていきたい。

多摩川の天然あゆは江戸時代からの食文化の復活といえます。スローフードを食べようといわれるようになり久しくなりますが、もう一度日本の食文化を考えるきっかけとなりますようお願いしつつ、これからも当店自慢の「あゆの天ぷら」を



続けていこうと思っています。

環境問題がクローズアップされている中で、人や生き物にも優しい多摩川は人々のやすらぎの場であり、いつの日か多摩川で屋形船に乗って家族連れであゆ料理を楽しめる未来がくるかもしれません。蕎麦酒房「^{しょう}笙」は多摩川のおゆと共に、次世代の子供たちへのメッセージを担っていくことを願ってやみません。



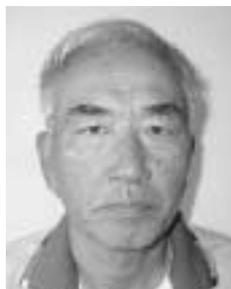
蕎麦酒房「^{しょう}笙」

TEL : 044-952-4756

川崎市多摩区生田 6-6-5
(生田駅より徒歩4分)

私と多摩川

清瀬の植物(清瀬の植物調査報告)
を刊行して



清瀬の自然を守る会
会長 富田 公三

東京の多摩地域北部、武蔵野台地が埼玉県と境を接するあたりに位置する清瀬市は、古くから武蔵野の面影を残す自然豊かな地域として知られ、かつて牧野富太郎博士、檜山庫三氏、飯泉優氏などの著名な植物学者の活躍の舞台ともなった場所です。

しかし都市化の進行による宅地開発で、生き物の宝庫だった里地・里山の減少、治水一辺倒の河川改修や流域湿地・草地の宅地化、さらに農家の利用放棄で荒廃した里山など、多様性を育む自然環境は大幅に失われて行く中、昭和51年この無秩序な開発から少しでも自然を守ろうと当会が発足しました。

当時開発対象となっていた結核療養所跡地の保全が大きな活動目標になり、以降10年に及ぶ官民一体での保護運動が実を結び、松山緑地保全地域(東京都)に指定され現在に残されました。



保全活動「雑木林」

昭和60年代になり清瀬市に協力し、清瀬のフィールドガイドブック3編(春・夏・秋冬)の調査・編集を当会が担当し刊行されましたが、当時から清瀬市の植物(リスト作成)の必要性を行政に訴え続け、実現できないまま今日に至りました。この間当会単独での調査・刊行の話も度々浮上しましたが、予算面と共に素人集団での調査には、時間的、技術的な限界も多くその都度立ち消えになりました。年々消えて行く貴重な植物の正確な把握と保全対策は、官民共通の緊急課題とは認識しつつも、漸く平成5年当会発足30周年の記念行事を最後の機会ととらえ、敢えて茨の道を進める決意を固めました。

当初3年で完成を目標に、植物に精通した取組役(正副2名)と調査リーダー(10名)を決め、一般会員

からの協力者も広く募集して、40名の調査体制を確立し、また著名な植物学者“哇上先生”に監修をお願いした。

次に市内を12地区に分割して各地区担当を決め、別に植物相の豊かな重点地域(12箇所)を設定し、同時進行の形で現地調査を開始しました。こうして3年間幾多の困難を乗り越え完了した調査の集計結果では、調査不足や同定不明種が次々に発覚し、監修者共々さらに1年間追跡調査が行なわれ、不十分ながら4年間で漸く現地調査を完了させ、5年目に調査結果の取り纏めと執筆編集作業が行なわれました。

本年3月遂に念願の夢が実現し、天然色で斬新なデザインの表紙と、代表的な植物や景観も掲載された「清瀬の植物」冊子として刊行され、北多摩地域の市では初の植物リスト完成に対して、新聞や雑誌などで大きな話題となりました。



当初懸念された挫折もなく、多忙な自然保護保全活動の傍ら、5年の歳月を要して会員だけの力で清瀬の植物の正確な実態が形になった事は、私達300名の会員にとって大きな自信となり、清瀬市の文化・歴史・教育などの向上に些かの貢献ができたと考えております。また、平成8年当会が中心となって調査編集し、市が刊行した“清瀬の名木・巨木百選”冊子と共に、今後の植物調査の基礎資料としての利用価値は大きいものと思います。



保全活動「河川域ピオトープ」

歴史・多摩川

江戸上水の歴史



東京都水道歴史館
統括責任者 八木岡 博光

はじめに

天正18(1590)年家康が江戸に入府した当時の江戸は、まったくのひなびたありさまであったという。そこでまず、家康は家臣大久保藤五郎に水道の見立てを命じた。藤五郎は小石川に水源を求め、目白台下あたりの流れを利用し、神田方面に通水する「小石川上水」を造りあげたと伝えられる。江戸の発展に応じ拡張されたこの上水は、水源を井の頭・善福寺・妙正寺の三池に求め、「神田上水」として完成される。当時の江戸の人口は、約15万人ほどであったが、三代将軍家光により参勤交代が確立されると、人口が急増し水不足が深刻化する。そこで、多摩川の水が必要となっていたのである。

玉川上水

承応元(1652)年幕府は、多摩川の水を江戸に引き入れる計画を立て、工事請負人として庄右衛門・清右衛門を、総奉行に老中松平伊豆守信綱、水道奉行に伊那半十郎を任命した。羽村から四谷大木戸(現在の新宿御苑)まで約43キロメートル、標高変わらずか92メートルの緩勾配を自然流下で導水する水路はわずか8ヶ月の工事で完成し、承応2(1654)年6月には地下に布設された石樋・木樋によって、江戸城を始め四谷・麹町・赤坂の台地や芝・京橋方面にまで給水された。



羽村堰にある玉川兄弟銅像

玉川上水の分水

玉川上水は、武蔵野台地の稜線部を流れているため、分水が可能であった。最初に分水されたのが野火止用水で、川越城主松平信綱が玉川上水開削の功により許

可されたものである。「上水記」によると、寛政3(1791)年頃には33もの分水が記録されており、これらの分水が、飲料水・灌漑用水・水車の動力として利用され、水の乏しい武蔵野台地の開発に貢献した事実は明らかである。

近代水道へ

慶応4(1868)年、明治維新を経て江戸は東京になったが上水はそのまま使われた。しかし、木樋の管理が十分でなかったこと等から、水質は次第に悪化し、明治19(1886)年、横浜から流行したコレラが東京でも猛威をふるい、死者が1万人にも及ぶ大惨事となった。その後、明治31(1898)年、淀橋浄水場の完成によって、原水を沈殿・ろ過し、鉄管によって加圧給水する近代水道の給水が始められたのである。

そして今

羽村から小平監視所までの区間は、現在でも水道施設として使われているが、昭和40(1965)年の淀橋浄水場の廃止後は、小平監視所から下流は水の流れが途絶えていた。しかし、昭和61(1986)年、近隣の人々の願いも手伝って、その流れが復活した。木陰が人々を癒すため、数多くの人々がこの流れに沿って歩き、学び、語り、その風景をカメラに収めていく。江戸時代から続くこの流れは、今でも人々の心を引きつけて止まないようである。



玉川上水(拝島上水橋付近)

東京都水道歴史館

東京都水道歴史館は、東京における水道に関する歴史的資料を展示する施設として、平成7年に開館し、平成20年に展示内容をリニューアルしました。玉川上水をはじめ、江戸上水に関するものや、実物の木樋や上水井戸が展示されている都心の穴場スポットです。



東京都水道歴史館(長屋と上水井戸)

所在地：東京都文京区本郷2-7-1

電話：03-5802-9040

開館時間：9:30～17:00(入館は16:30まで)

休館日：毎月第4月曜日、年末年始

インフォメ 多摩川

多摩川流域の各種団体等の9月から12月頃まで行われる環境活動に関する主な行事・イベント情報を紹介いたします。

美しい多摩川フォーラム

○おおた商い観光展 2010 に「美しい山形・最上川フォーラム」とともに連携・協力
(10月16日～17日、大田区産業プラザ P io)

○京王クリーンキャンペーン共催(11月上旬、多摩市)

○美しい多摩川クリーンキャンペーン月間(11月)

○第3回多摩川子ども環境シンポジウムを開催(12月11日、昭島フォレスト・イン昭和館)

問合せ先 美しい多摩川フォーラム事務局(青梅信用金庫 地域貢献部内) 担当:宮坂/土方/及川

TEL:0428-24-5632 FAX:0428-24-4646

Email:forum@tama-river.jp URL:http://tama-river.jp

がさがさ水辺の移動水族館

○9月4日 13時～ 青梅河辺河原 青梅線河辺駅下車 ふれあい移動水族館・出張おさかなポスト開設・水と地球環境紙芝居

○9月11日 10時～ 川崎市平和館『親子で来て、見て、考える平和事業』 ふれあい移動水族館・出張おさかなポスト開設・水と地球環境紙芝居

○9月12日 世田谷区 学童多摩川川遊び 詳細お問い合わせ下さい。

○9月12日 多摩区菅子どもの森まつり ふれあい移動水族館・出張おさかなポスト開設・多摩川天然アユの塩焼き・水と地球環境紙芝居

○9月13日 稲城市立小学校 プールdeライフジャケット体験 詳細お問い合わせ下さい。

○9月19日 9時45分～15時 たまたま子育て祭り 川崎市多摩市民館 ふれあい移動水族館・出張おさかなポスト開設・水と地球環境紙芝居

公式ホームページ <http://tamakofes.com/index.html>

○9月25日 10時～ 多摩区民祭 生田緑地 10時～ ふれあい移動水族館・出張おさかなポスト開設・多摩川天然アユの塩焼き・水と地球環境紙芝居

○10月9・10日 かわさきみなと祭り 川崎マリエン 10時～ ふれあい移動水族館・出張おさかなポスト開設・多摩川天然アユの塩焼き・水と地球環境紙芝居

○10月17日 9時～12時 多摩川親子釣り大会 多摩区稲田堤多摩川河川敷 無料駐車場有り 参加自由、事前申し込み

○10月23・24日 国立オリンピック記念青少年総合センター 第3回いい川・いい川づくりワークショップ発表会

○10月29・30・31日 10時～ 川崎市民祭 ふれあい移動水族館・出張おさかなポスト開設・多摩川天然アユの塩焼き・水と地球環境紙芝居

○11月20日 ふれあい移動水族館・出張おさかなポスト開設・水と地球環境紙芝居 詳細未定

○11月21日 秋のアユまつり アユの産卵場観察会 詳細お問い合わせ下さい。

○12月5日 多摩川天然アユの人工授精・放流会 詳細お問い合わせ下さい。

○12月9・10・11日 エコプロダクツ 東京ビックサイト ふれあい移動水族館・出張おさかなポスト開設・水と地球環境紙芝居 詳細お問い合わせ下さい。

○12月25日 調布市家庭教育セミナー 多摩川の環境保全活動から見える現代人のモラル、命の意味 詳細お問い合わせ下さい。

○12月31日～1月1日 23時～ 多摩川年越し感謝祭 多摩川河口川崎市側ゼロキロメートルポスト 詳細お問い合わせ下さい。

問い合わせ・連絡先 メールアドレス RiverRanger777@gmail.com 電話 090-3209-1390

財団法人 世田谷トラストまちづくり

世田谷トラストまちづくりビジターセンター「身近な自然と触れ合うミニイベント」

～世田谷区成城4-29-1(野川沿い)

(毎月第2土曜日・原則午後1時30分～3時 要申込、内容により時間変更有)

野川せせらぎ教室～世田谷区成城四丁目付近の野川

(11月14日・午前10時～正午 *要申込)

問合せ (財)世田谷トラストまちづくり トラストまちづくり課

TEL 03 - 6407 - 3311 FAX 03 - 6407 - 3319

財団HP <http://www.setagayatm.or.jp/>

GeoWonder 企画 むさしの化石塾

○野外計画主催 GeoWonder 企画 むさしの化石塾 「岸辺の楽校」 日程

・10月30日:日野市栄町 足跡化石観察 1時30分日野駅集合

・11月27日:飯室層化石採集 1時30分小田急和泉多摩川駅

・12月18日:狭山丘陵 メタセコイア樹林と狭山層巡り 武蔵村山市民体育館1時30分

参加費1,000円(資料代含む)

申込・問合せ むさしの化石塾事務所 福嶋まで

携帯:090-1769-8020 FAX:042-567-1095

Web 申込 E-mail:geo@extra.ocn.ne.jp

多摩川自然観察会

10月17日(日) 羽村堰周辺の多摩川と羽村市郷土博物館 青梅線「羽村」駅南口階段下集合・解散

*たまには別の場所へと思いつつもカワラノギクを見たくて結局また羽村に来てしまいます。羽村と言えば玉川兄弟と中里介山、ほかにも多摩川と密接な関わりを持つ郷土の人たちの生活を川辺にある郷土博物館で学ぶことが出来ます。

11月21日(日) 御岳渓谷とせせらぎの里美術館ならびに玉堂美術館 青梅線「御岳」改札口駅集合・解散

*紅葉狩りは御岳渓谷でと思うのは古今変わらず川合玉堂を治め多くの文人墨客が当地を訪れています。冬鳥の到来を確認しつつ警告を遡って丹縄の美術館を訪ねます。

入館料は玉堂美術館500円、御岳美術館500円、せせらぎ美術館300円。

12月19日(日) 陸橋周辺の多摩川と石川酒造「資料館」 青梅線・八高線・西武拝島線「拝島」駅改札口 集合・解散

*ほかに多々ある博物館にも寄りたいが、正月のお屠蘇は多磨の地酒でという誘惑も断ち切れず、ついふらふらと石川酒造へ。もちろん河川敷に多数点在する池廻りがメインです。

申込・問合せ 多摩川自然観察会 柴田隆行

TEL 042 - 636 - 0902

E-mail:fbstein@cocoa.plala.or.jp

みずとみどり研究会

9月25日(土) 13時～16時30分 第2回地下水保全プロジェクトセミナー

場 所 日野市生活・保健センター 参加費 無料 テーマ 『浅層地下水の研究』

11月7日(日) 13時～16時30分 第3回地下水保全プロジェクトセミナー

場 所 未定 参加費 無料 テーマ 『深層地下水の研究』

主 催・申込み・お問い合わせ先:みずとみどり研究会

連絡先 〒185-0021 東京都国分寺市南町2-1-28 飯塚ビル202

TEL/FAX 042 - 327 - 3169 E-mail:mizutomidoriken@ybb.ne.jp

財団からのお知らせ 助成研究募集のご案内

多摩川およびその流域の環境浄化に関する 基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究・活動助成の募集

財団法人とうきゅう環境浄化財団（会長 西本 定保）は、1975年（昭和50年）より、多摩川およびその流域の環境浄化の促進や自然環境の保全などに必要な調査や試験研究を毎年公募してきています。その結果、これ迄に1,076件（新規・継続 - 学術研究679件、一般研究397件、12億7千万円）の調査・試験研究のお手伝いをさせて頂きました。

2011年（平成23年）4月からの助成についても、従来と同様、意欲的な調査や試験研究を募集致します。

1. 応募資格者

下記研究対象テーマに掲げた調査や試験研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 助成研究対象テーマ

産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究
排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
多摩川およびその流域における水の利用に関する調査および試験研究
シンポジウム、音楽会あるいは出版等による環境啓発活動や、歴史的な遺産あるいは社会システムの維持保全・回復運動等、多摩川及びその流域における環境保全や文化の創造に広く寄与するもの。

3. 応募方法

当財団所定の申請書に必要事項を記入、捺印の上、財団宛ご提出下さい。

「募集要項」「申請書」はホームページ上からダウンロードするか、200円切手同封の上、財団宛ご請求下さい。

<http://home.q07.itscom.net/tokyuenv/>

4. 助成の決定

2011（平成23年）年3月に開催予定の当財団選考委員会で選考のうえ、理事会に諮って最終的に決定致します。

5. 応募締切日 2011（平成23年）年1月14日（金）

6. 応募にあたっての注意事項

ご応募にあたっては当財団の定める「調査・試験研究助成に関する調査・試験研究の選定基準、助成の方法、調査・試験研究の実施方法、助成金の支払い方法ならびに調査・試験研究者の個人情報の保護の方法に関する規程」を必ずお読み下さい。

過年度に不採用となった調査や研究の再応募は受付けておりませんので、同一の調査・試験研究課題で再応募される場合は、前回のものと調査や試験研究の内容のちがいがよく判るよう工夫して、申請書をご作成下さい。
(次ページへ続く)

7. 助成研究の種別と諸条件

研究の種別	学術研究	一般研究
研究の区別	環境問題改善のための調査や試験研究で、専門性が高く、その分野の学識経験を必要とするもの。 (財団のホームページで過去の研究事例をご参照下さい)	環境問題改善のための調査や試験研究で、一般の市民が、特別な学識経験を必要とせず取り組めるもの。
1件当たりの助成金総額の上限額	400万円	100万円
単年度の助成金上限額	200万円	100万円
研究期間	最長2ヶ年	最長2ヶ年
助成対象費目	<p>(1) 器具備品費 原則対象外。ただし所属機関や個人で所有するものがなく、調査・試験研究や活動に必要不可欠なものと選考委員会で認められたものはこの限りではない。</p> <p>(2) 消耗品費 調査や試験研究に用いる各種材料、部品、薬品等。</p> <p>(3) 旅費 調査や試験研究のための交通費、宿泊費等。</p> <p>(4) 謝金 調査や試験研究のために臨時に雇った人の謝金等。</p> <p>(5) その他 器機・設備などの賃借料、通信費、その他。</p>	
<p>尚、学術研究については、研究計画の全てが助成金によるものではないこと。旅費、謝金は、それぞれ助成金要望額の30%を上限の目安とすること、上限の目安を大幅に超える場合は、その理由を詳細に記した説明書を申請書に添付してご提出下さい。</p> <p>一般研究については、従来からの調査・試験研究に加えて、シンポジウム、音楽会あるいは出版等による環境啓発活動や、歴史的な遺産あるいは社会システムの維持保全・回復運動等、多摩川およびその流域における環境保全や文化の創造に広く寄与すると思われるものも選考の対象といたしましたので、奮ってご応募下さい。</p>		



絵：東郷なりさ

「いきものつながり」制作プロジェクト
代表 下重 喜代

発行 サステナブル・アカデミー・ジャパン
E-mail : kiyo-sun@nifty.com

「いきものつながり」環境紙芝居 15のおはなし

No.1 里山の生態系ピラミッド

生態系は、いきものと固有の環境が関係しあって形成されたものです。里山の環境を例にとると、生態系の頂点にいるオオタカが生きていくには、いかに多くの緑が必要であるかが分かります。植物を食べる多くの昆虫、その昆虫を食べる小鳥たちがいてはじめて、オオタカは餌の小鳥を得ることができます。また、枯れた植物や動物の遺骸をミミズやムカデなどが食べ、更にキノコや菌類が分解して無機物の土に戻します。植物はその土からまた養分を吸収して成長します。この“食う食われる”の関係が、ピラミッドの上段にいくほど量が減るのは、採食や消化に多くのエネルギーを使うためです。

今年には生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が名古屋で開催されます。COP10では、人と自然が共存し、いきものが賑わう里山をシンボルに「SATOYAMA イニシアティブ」として日本から世界に発信されます。

発行日 平成22年9月1日

編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団

〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14

(渋谷地下鉄ビル8F)

TEL (03)3400-9142

FAX (03)3400-9141

ホームページ <http://home.q07.itscom.net/tokyuenv/>

